

「書くこと」と「対話」で 将来を何度も考えさせ 目的意識を持たせる

秋田県立能代高校は、2007年度から「Will Project」を展開している。書く指導と教師との対話を通じ、生徒に自身の将来を徹底的に考えさせ、大学卒業後を見据えた進路意識を育み、学びへの意欲を高めようとしている。

第1志望へのこだわりが薄い 生徒の意識を変えたい

秋田県北部を代表する進学校である能代高校が夢と志の育成を進路指導の柱に据えたのは、「与える一方の受験指導」に限界を感じたからだ。同校では学力別の特別補習や難関大対策などの手厚い指導により、例年120人前後が国公立大に合格している。一方で、多くの教師が生徒の志の希薄さを感じていた。生徒はまじめに勉強するものの、受験が迫る時期に模試の成績が少しでも下が

ると、その学力で入れる大学に志望も下げてしまうという具合だった。進路指導主事の石井勇悦先生は当時の生徒の意識を次のように話す。「大学進学を希望していても、目的意識が希薄で、第一志望へのこだわりが薄く、踏ん張りが利かないのです。目先の受験指導ではなく、将来を真剣に考えさせ、夢、特に志を育てることが重要だと感じました」この課題解決に向け、2007年度に着手したのが「Will Project」だ。「大きな夢と高い志を持ち、自己の可能性に挑戦する気概を持った生徒

の育成」を目指し、構想したプロジェクトである。核は「総合的な学習の時間」（以下、総合学習）を中心に行う「考えさせる」進路学習だ。1年生は職業研究や社会人講話を通して「社会を知り、夢を育む」、2年生は踏み込んだ進路学習で「自分を知り、志を確かなものにする」、3年生は進路別の探究活動を行い「挑戦する気概を育てる」という目標を基に進路学習を計画した。将来をしっかりと考える、目的意識を持てるような指導としたのだ。

「ライフプラン」を作成し 自分自身の一生を考える

同校の進路学習の特徴の一つは、大学だけでなく、将来の職業や家庭も考えさせ、大学進学に対する目的意識を持たせていく点だ。1年生の末に行う「ライフプラン」(図)では、現在から死ぬまでの自分の一生を表にまとめ、夢を実現するための将来構想を書く。山本達行校長はその意義を次のように語る。「高校生は、『人生はいつまでも続くもの』と思いがちです。しかし、

秋田県立能代高校

◎1924年に県立能代中学校として開校。2007年度に文部科学省「高等学校におけるキャリア教育の在り方に関する調査研究」の指定を受け、夢と志を育む「Will Project」を展開。部活動では、10年に軟式野球部が全国制覇を果たした。

設立 1924(大正13)年

形態 全日制/普通科・理数科/共学

生徒数 (1学年) 約235人

10年度入試合格実績(現役のみ) 国公立大は、北海道大、秋田大、東北大、筑波大、千葉大、東京大、国際教養大などに114人が合格。私立大は、上智大、中央大、明治大、立教大、早稲田大、同志社大などに延べ212人が合格。

住所 〒016-0184 秋田県能代市字高塚 2-1

電話 0185-54-2230

Web Site <http://www.noshiro-h.akita-pref.ed.jp/>

社会で活躍できる期間はせいぜい四、五十年です。限られた人生の中で何が出来るのかを考えさせることは、高校生にとって非常に意味のある経験だと思います」

「ライフプラン」には、節目とな



秋田県立能代高校校長
山本達行 Yamamoto Tatsuyuki
教職歴34年。同校に赴任して3年目。「モットーは成せばなる」



秋田県立能代高校
石井勇悦 Ishii Yuetsu
教職歴18年。同校に赴任して7年目。進路指導主事。「取り組みの本質」は何かを常に考え指導したい」



秋田県立能代高校
阿部聡 Abe Satoshi
教職歴18年。同校に赴任して2年目。教務部。「何事もひたむきに一生懸命に取り組みたい」



秋田県立能代高校
柏谷浩樹 Kashwaya Hiroki
教職歴14年。同校に赴任して7年目。進路指導部副主任。「鍛える」と「育てる」のバランスを上手に取りたい」



秋田県立能代高校
奥山昇 Okuyama Noboru
教職歴8年。同校に赴任して2年目。進路指導部。「授業でキャリア教育に貢献できる方法を模索したい」

る年齢とその時々々の「学校・職業・夢」「家庭」の状況、「志や思い」を書く。ロボット研究、管理栄養士、高校教師など、思い描く未来像はさまざまだが、「夢に向かって近づいていく」「社会に貢献できる会社就職したい」などのコメントからとする思いが伝わってくる。

ただ、10代半ばの生徒に自身の一生涯を思い描かせることは簡単ではなく、「就職」「結婚」「老後」の3

図 「ライフプラン」の生徒の書き込み例

My Life Plan		夢と志	家族の思い
高度な技術 豊かな態度力を持ち、人々の暮らしがより良いものとなるための工学研究を行う。		絶対入学し夢をかなえたい。enjoyします。	
16	18	22	26
30	31	33	36
46	50	53	64
66	70	78	85
こんな人生にしたい	やりたいと思、たことはやる！ やりきる!! そして楽しむ		

生徒は大学進学、就職、結婚、仕事などを思い浮かべながら、どのような人生を送りたいのかを考える *学校資料を基に掲載

とこそが重要なのです」

社会と自分とのギャップを体験させ、考えさせる

夢と現実とのギャップに気付かせることも、進路を考えさせる上で欠かせない。同校では、夏休みに2年生全員がインターンシップを行う。就きたい職業への理解を深め、実現に向けて、自分が今何をすべきかを考えさせることが目的だ。例えば、ある医師志望の生徒は医療現場での実習を通じて、「医師がこれほど厳しく、コミュニケーション能力が必要な仕事だとは思わなかった。自分が努力すべきことが明確になった」と感想を述べた。

「職業人として責任を果たしていくために、学力や技術以外にも必要となる能力は多くあります。インターンシップでそれらを体感し、自己のポテンシャルを高めるべく、その後の高校生活を充実させることが真の狙いです」(石井先生)

そうした気付きを得るには、生徒自身が高い意識を持ってインターン

特集 くり返し「考えさせる」進路指導

SPECIAL ISSUE

シップに臨む必要がある。派遣先を決める際には、「なぜその職業なのか」「その職業を通してどのような社会貢献をしたのか」などを100字程度で書かせる。それを基に担任と副担任が面談を何度も行い、「ここはもっと具体的に」などアドバイスをしながら書き直しをさせて、生徒の考えを深めていく。

「一度の提出でOKとなる生徒はほとんどいません。とことん考え抜いて決めた派遣先だからこそ、目的意識を持ってインターンシップに臨めますし、実際の体験から得るものも大きいのです」(阿部先生)

担任の負担が大きいようにも見え、直すべき箇所は赤線を入れたり○で囲んでおいたりして、直接、面談で伝える。進路指導部の奥山昇先生は「生徒と対話を繰り返すうちに、通常の面談では見えない側面を知る機会にもなります。物理的には大変ですが、生徒把握の機会と捉えれば負担感はありません」という。

「志望理由書」の作成を通して考えを深める

3年間の進路学習の中で、最も

重要な課題は2年生の最後に書く「W3プラン」(志望理由書)だ。これは、2年間の進路学習を通して培った夢や志を実現するための大学・学部を選び、志望理由を約2000字にまとめるというもの。

執筆に際しては、盛り込むべき観点(これまでの活動から得た価値観や課題、その大学でなければならぬ理由、卒業後の社会貢献など)を示したワークシートにまず取り組み、それを基に文章を構成する。ここでも鍵となるのは、生徒と教師との対話だ。ワークシートに沿って書けばよいとはいうものの、第一稿の大半は薄い内容で、脈絡もない。担任・副担任と何度もやり取りをする中で、生徒は自分と向き合い、悩みながら考えを深めて、志望理由を書き上げる。

「W3プラン」での志望校は、あくまで自分の夢や志を実現するのにふさわしいかどうかという観点で選ぶ。難易度などの合格可能性までは考慮しない。夢の実現に向けた「宣言」のようなものだ。

それまでの進路学習で必要な自己分析や学部・学科調べなどはほとんど

ど終わっているため、志望理由書を書く頃には、多くの生徒が志望校を絞り込んでいる。進路指導部副主任の柏谷浩樹先生も「志望校決定が早くなった」と指摘する。

「以前は、3年生の夏になっても志望が未定という生徒が少なくありませんでしたが、今では多くの生徒が2年生の秋までに志望を決めるため、目標に向かって早く動き出せるようになりました。また、『志望理由書』で掲げた目標が高ければ高いほど、3年生での学力の伸びが大きいと感じます。偏差値で選ぶのではなく、しっかり考えた末での志望なので、実現に向けて前向きに取り組めるからではないでしょうか」

高い志を持つことが生徒を学びに向かわせるようだ。

「考えさせる」大切さを教師自身が実感

推薦・AO入試による合格者が増えたこともプロジェクトの成果の一つだ。以前は合格者が1桁だったが、07年度以降は毎年20〜40人が合格するようになった。さまざまな取り組みの中で考えを深める活動を積

み重ねた結果、目的意識が明確になり、自分自身の言葉で志を語れるようになったことが、効果的なアピール材料になっているようだ。

進路学習に対する教師の意識も大きく変わった。石井先生は「進路選択ありきではなく、まずは教師が生徒に考えさせることで、志を育む指導が不可欠だと実感しました」と述べる。授業中、教科内容に関連させながら社会貢献や志の大切さについて話す教師が増えているのも、意識の変化を示している。

課題は取り組みの継続だ。柏谷先生は、「変えるものと変えないもの見極めが重要」と指摘する。

「取り組みをがらりと変えてしまうと、当初の思いは継承されませんが、しかし、何も変わらなければ形骸化する恐れがあります。生徒に考えさせながら志を育むという根本は変えずに、目の前にいる生徒の変化に応じて、不断に取り組みを見直すことが大切だと感じています」

10年3月にプロジェクト1期生が卒業した。成果と課題をまとめ、次に継承していくこと。プロジェクトの真価が問われるのはこれからだ。